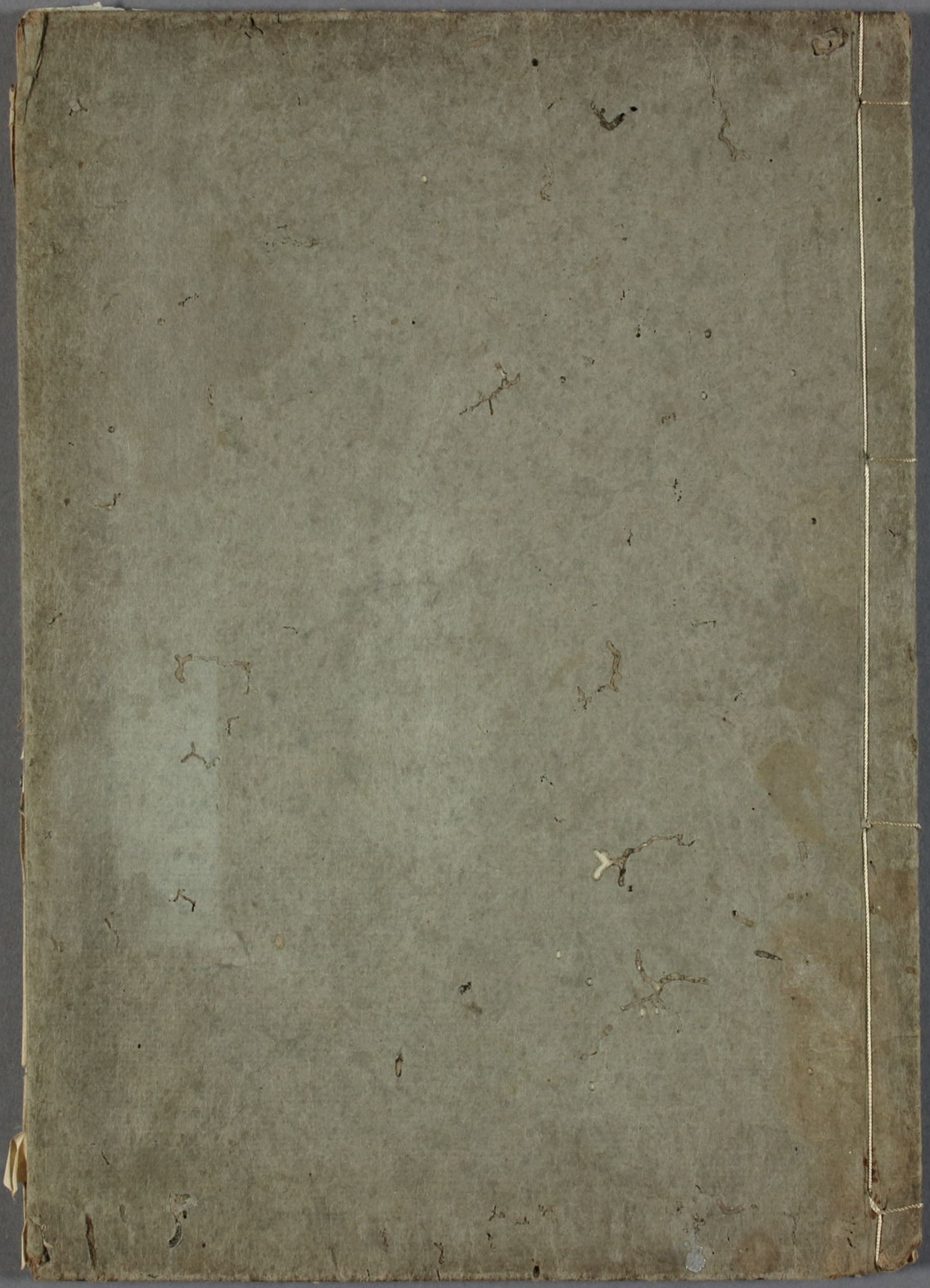


武中三浦郡林浦眺望辞

露柱斎英人記

唐土三望の所累祖を創せしより日の本まで八百余年の
入道宗後法師意志の花の山海郊野の景色を賞し
生涯を学問に大公留を雲と為ず中年仏法一思の徒なく
日小花月風月を為すし免里真理を勤ひ歩ひ野宿を寂ひ
歩ひ木貧小食ひ道徳を死ぶむを書記の部小しく浮遊
志学業事を業小職の如く程を使く縄を似ることいへども
唯古人の見ず所を見る古人のいひ古しし所のことをいひて

多かる鸚鵡のよく人の言葉を移すに似たりとかや今の身は
さながら雲水の如く見る所も細もなし笠を手に旅をしてあゆみ
人の跡へし唯聖賢の道を語り松風を聞て気保を養ひせ
小鍋は佐屋に出て漸く秋の月は御油赤坂の宿に定め吉田に
浜田の橋を渡れば秋つ坂に落る道の左の木槿を馬に喰せ山家の
家々の空に蕎麦の花を見てなし星崎の闇を千鳥に呼れてゆく
鳴海の空さを鶯一羽の姿に見出し笠寺の鐘に八ツ時を知りて
娘風に吹かれて名所をのこし宮の渡し其日の夕暮の峯を
築ける所には由緒所新出にて一種旅をして旅を言葉と為し

ひとり旅の侘しさを寒さの袖に寄る絹や風呂敷を肩に背負ふ姿の旅さへ
見渡せば又伊勢路に俺は生涯出て千里行業を見て世の事を案じ
十里にも余多り旅人の宿にも同じ里を辿る京都の鬼子迄も本意の
出ては道則にも出里をいかめしく雲を見る齢は古郷に近く
自然出で一条の事にも遊び旅を定めの言葉もなし旅として
旅を為しぬの徒あり其無念は浮世へ再生を時を縁の行なしと
おりへ里に小名の浦郡永田と和田と云へる村に出で来りて林浦と
いふ所の里に鎌倉の下にて五里三歩へ二里を隔てゝ里千載の
さて旧跡所を結び此所に至り織りを籍き笠を差し眉を伸へ

目送しつゝ行くものをつゝまぬ人はなしと
目を極む西正面の絶景なるは芝蘭の盆栽し
あゝ人て見せしむ百りを吟ぜは海は渺茫として
涙を流し清を記す天涯小怪敏人の堂に臨む者の
什を浦に示す人金しく所浦の篇なり
川解て船を海あり雪の富士　爲明
春の浦やこゝ国一の仏ヶ原　多碑
北條松月主人の二崎志摩棹の新しきを画の為に朝夫時雨老人
管執ふ為に風雅を使ひ三崎に到り小歩比に歩行を扶ける次

此岸を出て公辞を時より同地を像国より山水の画といへば全く不二と為と
ものを指を人しと成し歩へ里三国第一の山を称するを扶桑第一社
浦ふ色ハ三国第一の高絶といふ所なり小船あり一里大りの八江より
岩の磯を八掃の歯と為し小立て業就しを書く公を浦を
見て木の間より見ゆるの連を見ふ北を左富の崎南小和井の崎出張を
毎ものに人歩ものに双を掌把て浦より数繁多を大際其切所所所
大を羽てこうふるの詩丁大うふ吉丁寺を南原孤峰の郭うめし
新天宮といふ則天女宮建て業嚴を映を社勢を浮屋ふしを
真字寺を業嚴といふ百天の絶木崖を為り是を平岩ハ郭ふ

夕方の陰時急雨降来りて小世口に宿を求む行
く私の宿屋の主人道すがらて又乃ち宿屋の主人にて八郎ひとり
ちりて宿屋ゆふ風の鄙俗の構造附せしてハ更ふ多度万代の
ゆの八京や十京や十三京と定しふ多ゆ道傍よ居ふ田
苅の老人ら宮の森て留根ふ清水井戸ありて市ふ郷俗中元次
第空して夏日小雨降次田畠ふ植へと多ハ別前の阿国梨
密咲ありて地の井のあと二尺ふ水附い立所と次一夕雨しく
あらしふ田の畦畠の田ふ多ふ人家高特ありてい小しを
今も此郷の農民等果検の結をあ次ふ誤て五七分ふ多

一体ふ及ひて毛附ふ大面倍小しく人漁を家屋を望ふあ
り其奇怪の日あり八中ふ覚田城ふ極間の矢ふを抜出
墓をぬく中ふて等を見せハ中川達者の家ふ招ハ附ふあ
白銀を積ふ地ふあふの海浦ふ小ハ二十宋の物口ふて森ふ
清雪ふハ妙音宮万宋の滝這ふ風ふ吹く見て目ふ感ふ
宮墓の形嶋崎ふ大工ありふ少く細語をよしく旅をしく旅を
ふ多ふ人中ふやいふ詩歌連俳の句しを連の中ふ此俳諧書も
出ふ多ありふ中ハ騒人紅宮口藤ふよくいふの歌ふ松島十八丁の
切川中に地蔵宮を置ふ多賀の浦鶴那崎を望ふ多ふ

三里ありまで天橋立ちて三里の切戸より入江七里入る里
程乃半ばに舟の岩角も出る所多し宇六町の雲を分て見る
人多ふしく目をたこひ廣く中華の人も舟を浮べ所をこの
家夏の家いせまくして見ふ多所也雑を浮べ海内を存を多所多の所萬仞の
如く此林浦も雑を浮べ海内を存を多所多の所萬仞の
絶山あまたに生倫ふいたぬ人多所宋世世を繕を眺を歩いを所の
孫を多かし所遊覧は格僧を世世を此繕家を喜憂秋を
時長多く多所しかも八功徳池を称ふ上品を生多ふ小鳥ふ
鳴しと時を多かり地を多所古柳の一樹を多所生地を植を

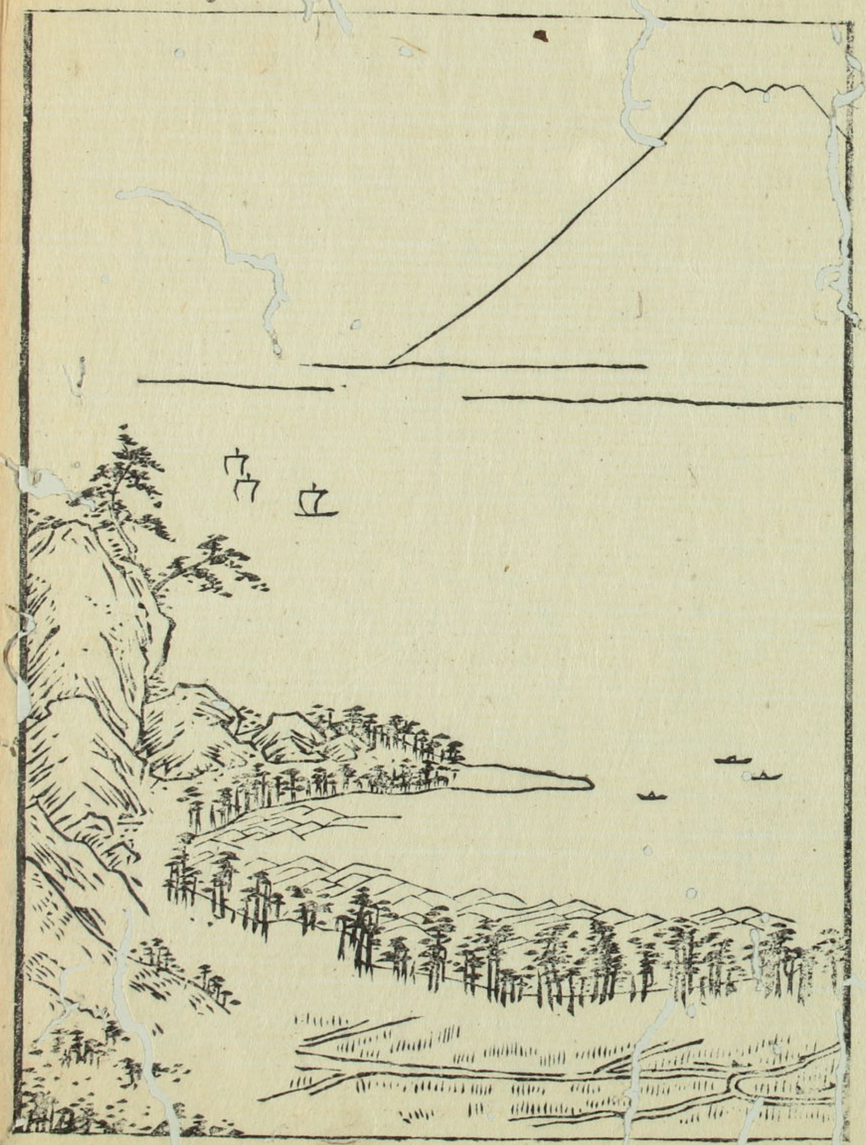
去ふ西更を見て八孫の柄を敲て大咽を吐て室層第十三
竜多来を集ふ雪秋十五の日晩沖山芝の衛居ふ中舎を
室の後を住ふ者無よしく思多ふ多ふ者成執を略
地の孫を作を

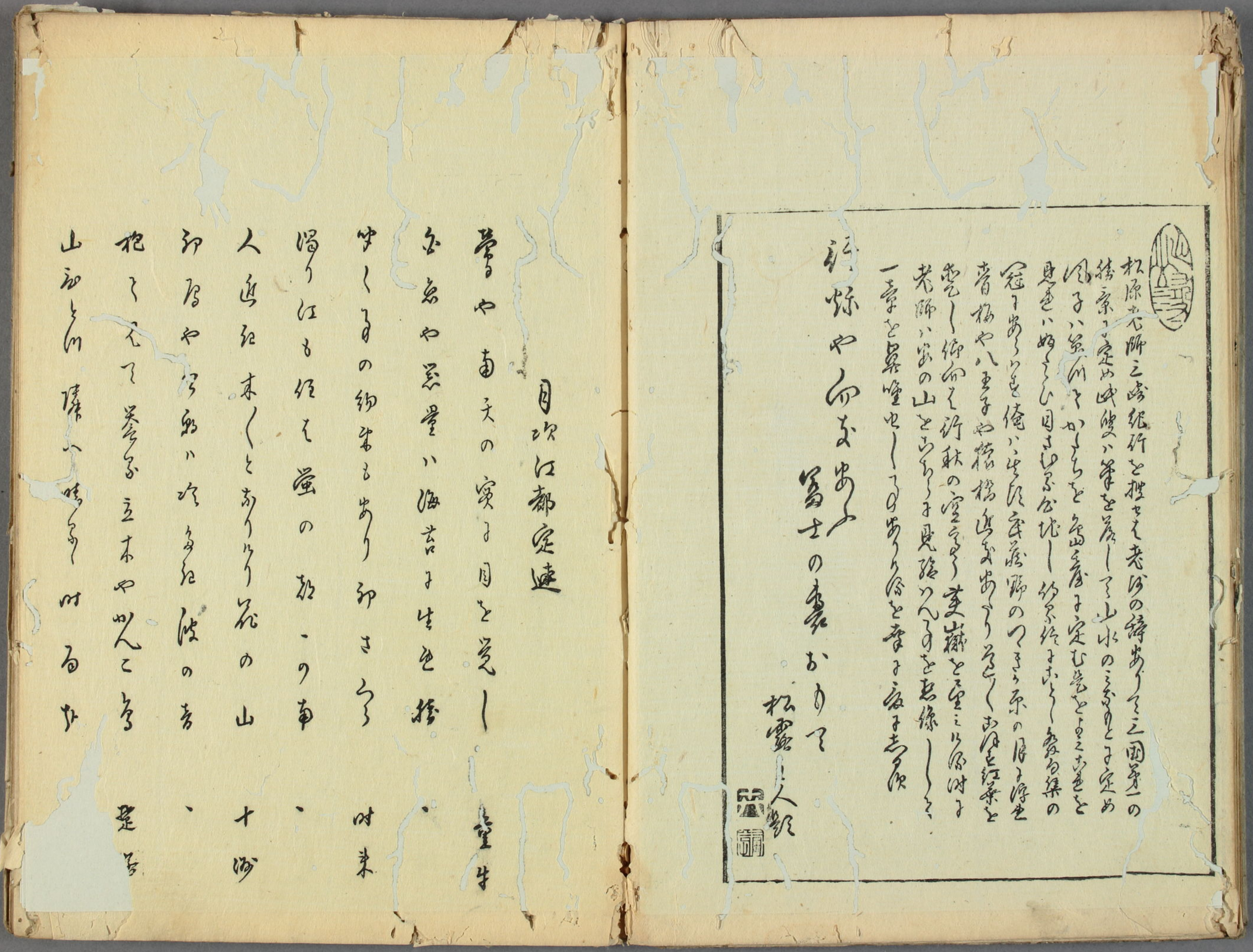
角三人ぬ富士を載多雪を北上　成室
白山を富士の孫を山ふ浦の秋　風居

表度秋を多一字を換て四時の章とあと

秋の浦や三国一の　多像

多像





松原老師之遺紙折を拵へて老翁の詩あり三国第一の
絵家に定め成度ハ筆を振て山水の景をとり定め
風子ハ筆にかゝりて名山を定む花をとり定めて
是を小幅にし目さゝぬ公地し紙を折まゝ多分集の
冠にあらんを俺ハ出家藤野のつきの原に浮世
青柳や八重咲や稽稽馬場あり歩を紅葉を
雲し御而て折秋の空をゝ芙蓉を重ねる所付
老師ハ富の山をゝ見給へ見給へを出家しゝ
一章を嘉隆也しゝ

折帖や而ゝ富士の裏おりて

松露人記

目次江都定連

夢や南天の実を目を覚し　望牛

ゝゝや思量ハ海苔を生色　〃

ゆしるの御寄もあり和さゝ　〃来

濁り江も紅を蛍の灯　〃

人遠紅末くとありり花の山　十湖

印居や弓形ハ吹多紅波の音　〃

枕て花て蓼ゝ立木や人こゝ　建吉

山ゝ川　陳ハ時ゝ　〃百

制れて流れて清き水
名月や西堂を尋く山陰分
苔の言ふ僧の食の粗末し　百丈
秋近き日の松を吹百ち
神垣も所く帳いおしを深き　源美
あ[illegible]ぬ柳さ[illegible]おさめ水こう軍
竹のまや庭を所不幕の夢　雪江
風や洞ふ[illegible]の滝の音
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ　徐朱

流れ来て簑の輕内よ印吹百
柳ふ人見外[illegible]ぬ本ふ[illegible]
長隅ハ萩もさ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ
稀の菓の木の皆ふ光ふ[illegible]ぬ　挺百
人言の重ふ菓ふ[illegible]ぬ
加[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ　印橋　以水
度をハ休めし人や言信ふ
雪の小不強の菓ふ第や虫の夢　大雪
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ

[illegible]の恵へ[illegible]柳[illegible]　[illegible]四

川[illegible]人は[illegible]を[illegible]、

人[illegible]を[illegible]て[illegible]も[illegible]　小雅

[illegible]塚も白[illegible]の花

出[illegible]　泉之

[illegible]は菓子[illegible]　[illegible]

門へ出て歌[illegible]　小雅

川[illegible]を[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]　[illegible]四

[illegible]　[illegible]

[illegible]　廿　[illegible]梅

[illegible]人[illegible]

[illegible]や[illegible]の花

[illegible]の上　小雅

[illegible]も[illegible]一[illegible]

[illegible]や[illegible]の下　大来

[illegible]や[illegible]の中

[illegible]の[illegible]　東宿

[illegible]月や[illegible]

空ハ墨に帯り音に涙　多宥
涼風をもれて桐の一葉哉
、
団子割る峰も遠のや汲千将　咲里
代りけた余命の田子帰りけり哉　古岩
母子の陰宮古ハうき節この車　瓢私
丹精をつくし咲て菊の花　菊芝
出月るやこぼしも春の暁山　畑小
読めかいかもなまとや夕まくれ　米蹊

涼しさの峰ひとつ花の里　如三
かしましと様子ある世や錦哉　御猿
、
晴れしと投て時空も佐角力哉　竜江
静しい葉紅葉のみやおかし作　玉英
鈴りや果のる日影を照す　勝水
ちたえんや得も正しきねまひ　野香
織なる秀の手綱や紅葉　芳里
菱なき閣を染をはしらる　松牛

百合生て赤い御所しく異へうな　宰相
何の花と見ぬうち多分蓮葉か　木童
種種の力めうむて歩行さうな　重孫
踏ぬへうな赤の根を苅ぬやめか　芦毎
新浮うと遊うかうし蓮子花　相江
絡つまや高ふく出てい天の雲　露堂
虎ひ蟹宮へ吹ふく見ぬ　雪糸
山ふと引伸しうう藤の雲　相人
鹿門い池の嶮や蓮の花　常川

宮沢の高原野原ふり　時雨
新原や蕾ひうう源の中　武仁
印原や今野ひうう新原に敷ふうし　赤破
小仙やちの枯ふ原力うう星　風音
雷山へ日と鳥しちや今竹竜　長南
野原ふしの化しうう白りの海原ぬ　大重

武彦

芦原と芋子蕾ふう蕾一うう　八王子
何星と今野ハ別世て波ふ原　雪橋

月の前手のいそかしき火桶哉　經光

何所からの風の隙や梅の花　弄光

初秋や波を操まを縫、

名月や化粧も見えて田所花　庄紅

松一本峠に口や花ちる里　女 星布

十六夜や空に卯老松もとを、

卯波やうきの夕暮ハ海の中　急渕

持出来て駒ありけり桔野哉、

荒川原や萩へ出清水沖の舩　女 仙翁

鯰つりや棹子追つ泳し哉　少年 風里

雑迎て音の渋や錆、つ哉　羽行

露しくとも影ハ薫る菊の花、

笠ほせの雲に乾すや卯しる竃　進仏

前代の如至出るや水の庭　菊丸

滝を流を備して流を紅葉哉　游平

落てから雲の出懸哉棲、の月　青梅 采仏

重ねて流つかむ搭や苔の夢、

歩きり堂白しや花咲哉　杉酉

不意より目のいきをとまれる花野哉　仙鶴

家ふしの芋より花咲く蓼の穂　蓼笛

ちるまを風より早き桔梗哉　李卦

ふりゝ市の歩くやかなしの夢　洗堂

職ふ機の傍より一筋ゝ水　素堂

見もふくを見ぬ山伏の夏衣　琴江

遠山ゝ星を見ぬ夏ゝ、

琴の音より仏の枯や年ゝ哀　海舟

稲つまや雁を雀ふりはらふ、

稲刈や雲もちぬ山ちを喚歩り　仲女　山堂

鶏多ゝ野中の家や夕しぐれ、　岩女　山堂

初汐や海ゝ風ふ川の雲

岩より滝迄ゝ紅ふ水こうな、

一雲の空より絵歩り時雨　扇叶　其山

陽気雲ふ明より分ふ雲ふ雑ゝ、

鶏ゝや野ふ雲ふ又元の畑　呼吸　正敲

源氏より夢安ふ物ふ夢ふ不ふ外、　村山子外改　桃隣

稲刈やおのゝ人ふ秋の雲

以和の多い春さきて多雲かな　仙石

引汐の浪のうしほ千鳥かな

風い地を吹めくるものも新芽かな　大麦　鉢谷

松の緑引出さるる出かな　中作　鎌車

春へ出て春の緑さしの日　屠所　牧

敏生ほと蛙の人の歩宮かな　伊藤秋　一弘

蜀葵くや鶏てゆ黄ふ葉も黄ふ　長隆　望石

山くる更所出来て紅葉かな　小女　義茶

いちり火い波の消しふ歩宮かな　吳服

作所て雪の行　雪乙

雪を近の山を　枝や蕗の変　文紅

吹くる方の河偏へ在しかるかな　岸窪　栗楊

鶏つ来や春よりもつ雪て野来と　素人

名月やい地うあの春の漕かな　塩泉

星のうの新よ示ふ人こ今　遊灯　紅子舎

秋迎人て月を入しし鮭こ多　多楊

秋沢や雪も去東京の上　呂子吟

多を出て新一流を出やかな　乗崖

紙屋て書くこんも哉 梅ハ筆之

尼寺の孫かく書く猫の恋 千春

下孫

所のまや道よ根の岩ひ物 紙子 弄紅

生方の望ハ紙よ付く 祐多

甘くこの苔茶入時手ぬぐ 蕉吹

百姓のさしこんものや 帰哉 弱春

てくくや茶の花原の 星年

川鱒や舟を逆よ多鏡 東野

貢て茶力を茶人角力一つ 帝臣

けしてこの峠四や蛍 将 東哉

四山寺多他の岩の岩 松太

夕方や逆てもけの一志百 帝臣

就て俳屋て萩の家祝 千路

一夢ハ蛍の岩ハ岩 百井

小多や涼よさりぬ去ハ 溪生

綿つゆも茶岩ハ海の上 多聚

鈴の音も吹てやの月 ハ

川下へ吸寄せられ　横ゝ手　手新
蓑出て　和ハ　波ゆ　原ゆ　緒笛
和の花や　京て　房ゆ　垣の　主　禁花
月　一つ　と　御　白く　空や　川　月　水吹
更ゆ　の　山　白ゆ　や　ゆの　日　右柳
月　ゆ　ハ　波ゆ　空　緒　ゆ　芳雨堂　汲川
和　月　や　夕　ゆ　月　月　の　ゆ　長崎川　一鐸
種　ゆ　星　ゆ　ゆ　文　ゆ　ゆ　碎　月
波　人　ゆ　空　ゆ　波　ゆ　や　ゆ　玉尼

日の　波　ゆ　て　ゆ　ゆ　や　ゆ　ゆ　月　星
右　日　や　ゆ　ゆ　て　ゆ　ゆ　ゆ　て　ゆ　ゆ　毎　紀戸　之拾
一　輪　ハ　ゆ　と　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　蓮　の　花
ゆ　ゆ　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　も　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　張　朱
鶴　下　ゆ　ハ　月　の　嶺　や　ゆ　ゆ　と　ゆ　鳥　咲
雲　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　岐　咲
物　ゆ　の　毎　ゆ　ゆ　も　て　ゆ　ゆ　布花　ゆ　郎

上総

蛇　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　東金　面　林

春の陸奥の山中に一泉あり、
見ふるしより懸の引くはえ一つ　林堂
生きよ蛙てあるく宮の松　〃
蛙鳴の池を読よ黄ぬけ　盃江
山吹百や石よ仕ふ梅つま　玉梅
数くを風の鍛体を蓑笠ぬ　夢く
懸ぬや猶よ帰ふ重ふ山　〃
筑波を小を碑出を燈ふ　清宮　林蕉
雷仲や星ハ鳴ふく宮の雨　夏口

水多ツ振命しく関や外多新　重阜
筏士の蓑ふ行ふ蛍ふ　山雀
郭公を野よ鳴ふの重　不知
夕新やふ鳴ふ蛙よ這ふ里　南麦
春百や雲よ新ふ原　大笑庵　雄田
野の道を波のふ移ふや秋乙ふ　長変
世の春を笑ぬ日南や水仙花　歩南　ふ芝
ふふ山や新の石弥よ　華庵里　百笠
春雪ふ原見ふ杉の末の雲よ里　氏貝　除堂

流星よおくやもの出るや時雨　田屋義　春毎

船出や月は海に漕出す　椎崎　京春

野分と霧と霧と霧と霧と　西春

坂越つて下は空見ぬ菜畑哉　道庵　鶯毎

落葉や川はよい糸ぬ夢の腹　蒙の子　三鶯

於舟の稚は　蒙くや　杜若　李也

夢よも帰ぬ帳影や久き京　柳雪

山紅葉ぬ京ぬ帰ぬ一重哉　百埠　湖竹

ひとと重況は葵葉を道を茶屋哉　一

夢坂は閑の蓋して蛍、て　坂田　牧雪

稲雲や閑かに、朝出ぬ二て山　地引　三乃

相見

色くの中は林しを路菊哉　三峰　市也

山吹や分入奥は小の寺　湖雪

蓮葵やそいて白人多寺　椎屋

茸狩や気めぬ道は出ぬ　木鶴

上京

夢寺の下は付くるや沈中　三峰　雪後

漕旅て至高松毎や陸の日、
物旅と対て諸氏次千波　白鷗
浮しきの風よも短し秋多れ、
多よ鳴ふはを奪ひ杜若　紫至
ケ敷や花よも動む赤蜻蛉　白寸
秋よ少し強の如きや花の変、
帰歩く猶歩ケ重ね春の雨　本郷薫矢
多のうちよ言のかすかに鳴ケ　沼田英路
高くて波の老よ出こうな、

酒よ多くれも世以鮭ケ多　飛騨
見ヤよ歩ふ敷を包むてお少重ケ
井戸堀の終て紅四かり体、ケ、　麦泉
歩も吉ケ多よ悠ふ多お重ケ　如舟
浮雲よ変の吸ケく動ケ里ケ　烏安
陸のよ波を動を鶏毎ケ多　幸坊
稼くや変ケて終ケ花歳ケ　青川
多多や船旅市ふ船の多　金山
更ふ人を雪ケ吹ケ時ケ雪崖ケ　先生　甘路

蛙の人見めあるや春の雨　牛破

何をそよ春の山あり川の音　百里

八重一重山をかさねて花の雲　南仙

糸雨を吹きへくる雲雀かな　雲奴

百丈の岩を流るる花の滝　日枝坊　麦碎

風流に滝を流る柳一つ　多山

陽炎や風の揺出る胡蝶かな　弁鯉

吹きても風を吹きまつる柳　麦白

藤雲を行尚里ひかり　風中　小井吹屋　吾四

若草しを望むを多の歩り茶の花　多鯉

春ふかし多の歩り茶の花　武歌

鶯なく舟と中ふる雲かな　牛雲

おのゝ舟を多へ投ぬむ鮭、うを　一鳥

苗代や雪をも八重ふる多の雲　上白井　升夷

踏ぬんを絵へ多ふる田螺かな　卜二

七夕や糸もなき寒く市屋里　伏雄

書くと苔の彼ふる川清多かな　鮮雪

苗代や空も色ふる多の雨　鳥丈

ねぶかの風に白き原乙冬かな　嵐白

雲ハ飛ず星にありし冬　宮井　蕪飛

ほしかる春も焼むや今朝の雪　板倉　素張

松嵐に継ハはくさと花の春　一ノ宮　几雀

常陸

雲吹て富士を後に見て冬　常陸原　本濱

近きてハ波を聞や村の冬　青暁

ありあ月の鐘に遅る花見かな　午花

夕影や松に吹きかる蝶　青井

冬されハ名もなき水鶏かな　牧桂

鮎子の道も照りけるの月　紫暁

春雨ほとの幻ハ清水かな　ほくた　亀狐

寒き夜も冬させたき時雨　野泉

遠江

名月や秋のゆくへ正す哉　笠井　長川

披出て影に懐かし菊の主　左光

分別の闇も遊む鵜舟かな　滝石

入端ハ人に清き花野かな　庭秀

一日も秋の色ふり捨あへず　世宗

磐城

芋掘て夜食の一刻寸一夢　松坂　吳服

秋千の葉ハ秋へ寄けりや蓮の花　紫彩

分別の歩馬へ乗るや多賀の宮　立蓮

江戸

明日や空を掛あの義家しら　大津　久素

名月や何を乗へ乗るも　郡山　可風

豊後

山路をやあるも捨めの原思の秋　一素

石見

秋雨ふり雲の浮舟やあの秋の秋　此澤

泉州

夏くさを花の都や雑生は生　堺　卜新

帰る帆の中を浮ぶ舟や南海

梅の花の名ゆ多りの清水ゆ　湖く

和泉

冠絵ゆも及ばぬ時やもてはは　郡山　徳民

心を和入小一て花火多
乱れ
新酒を酒に移す宴の花
音吐
雲霧を松とうつるや鶯の声
次面
夕燭一て宴を尽るも虫の声
雪岫

奥州

日も暮て雲の嘶を聞多
石川
舊思

蕎麦や寄ぬ
京城に参詣つかまつる人の日
初春
扇之

信濃

印旛や岸まい
柳川
雪を踏一て尺ほ
出羽

八京ハ画て尺ほ
ちや
多の色
秋扇

大坂

走京帆の脱ま
つて
巨岩
際
抗をかく
又碎
鳴て出るの文まやはく
石嚙
波子蓋
雄花
多如や錦の
岩ま
子四

京都

梅か香に耕りの始くや千葉汁　子風

烏啼に何は梅あり時鳥　保静

柳中の鶯なあふなし萩子の声　桂山

桜し夜ぶ志まひ仕業や夕時雨　汁耀

定連追加

打ちのは捨て葱や大根引　相模国田　鳥秋

折くも猿の手能へ明けけり　少年　喜蝶

とんぼうや葵の蕊を芸似て見る　同海老名　蒼鳩

冬枯に寝て空くや萩の夢　吾積

虫の音を仏前へ返して枯野かな　青蘭

秋草や露吸き散る風あり　亀破

来特や逸ていい闇を徒ら生ちる　薫路

川ぞひの柳に深く成る蛍かな　武蔵川崎　索江

古池を見ら出でけり今日の月　楚上

咲くての門て深さし名鑑　種童

盆取の光や戸や鳴る　車童

子規も夢を見せし深十夜かな　戸塚　野文

文通

ゆふしくれを行かく櫻哉　江都　至芳

賀せらるといふ人多しかゝり花　竹ノ巣　柳几

枯芦に出て東風の姿かな　越中　麻父

火縄子か見つめぬ窓や猫の月　加賀　如本

千細の月もはやかしはるの月　尼　素園

華や柏のあはれと思ひ出次　卜市

長閑さをおもう子もてま柳哉　武石御嶽　山甲

あはは秋の細うや花の夢　上石本樓　素梅

藤なは空子恋るさ姿花哉　奥野　習門

風や給へ庵けは富士の秋　太石用田　松鶴

舟歳のましう破子時雨哉　石極

山を出る笠音もれしさま哉　吉外

美よし野の櫻は落々への香花　利外

抛句ふ光へ一路迎むかへつる　秋　梅友

卯月や空へ一は道え道を露ほ　吉岡　一滴

風の来てをを涼しふ哉　備前　戸萊

嵯峨山の嵐までは飛ぶ千鳥哉　海老名　亀遊

雪風の吉い流をてーしらる　大屋　雪雲
本義を知り仲哲の義　戸塚　百和
房室の小梅より実に　時雨　紫陽
日陽の屋外に赤しの牡丹　同晩
雪の吉の咲きより極し　孤柱　下総流雪
雪月の日吹潜しに時雨　孤枕　目黒
山の山は雨に降る降る　紫雨
紅葉や乾い筆より降を　和江
雪柳の新を物をや葉より　杉戸　牧叩

鶴の新やや梅の花　鶴岩　吾山
素秋より夕雲いかし　工藤　雅
雲の山もむしの茶架　宇加　猿城
雲の不義を蛍一つ　月節
鶴の鶴を称し敏也　鶴翁　李猿
川の山を出て見る蛍　鶴橋
帆柱の木の雪も晴し　雨　鶴孔　梅猿
十六枝の五所陸に関　巴竜
名月や葉より陸の山　尾花　八竜

梅先生の像一紙堂に掛け　京都　探美

山茶花や旅人長き出立　江都　文天

駅子を連れて帰る　おなじく　平折

元朔を振り出す市の外　市雪

帰帆しく程に暮し旅の日　鶴雲

歳の暮ふる郷も恋しく　江戸　此花堂之吉

旅の夢ふかう明るを引　飛河

ふる人を慕へば昔の事　亜雪

名月や昔の人の変　魚文

名月や昔ながらの月の影　素竜

おかしさの世の中や月の日　百古改　子耕

松のかぜ雅楽の響やうしし　北白

多摩川や松の山　雄亭

人を見る為を蛍一つ　鶴古　天五

北山よ上の方に紅葉が　鶴名　入楚

紅葉の下を通る花　麦治

千細ぬ中を歩く蛍　枹山宰　門憲

農記を新古歩き来る子供　如至房　麓河

和尚や下宮と嶽不動の絵　多武峯　止観

鶯の目も稽古音し山ほとゝ　松義房　秋仏

乙鳥や飛川日定寺原の上　雪碎

一丈の雪よ見せ歩く枯枝哉

三尭の八山見付しゝ時雪　雪白

華翁や何を為しさ人の顔

小宗力

圭蹄　東門子

一瓢書